

関西談話(会話)における一音節語の長音化について

丸 田 博 之

はじめに

関西の言葉がメディアなどで取り上げられる場合、その特徴のひとつとして語られるものに「一音節語の長音化」がある。

それは、時として客観的な言葉の特徴として採り上げられることもあるが、むしろ、ある程度、興味本位で採り上げられることがないとはいえない。その原因は、一音節である語をあたかも二音節であるかのように発音されることが、ある種の「間延び感」や「不正確さ」を連想させることと無関係ではあるまい。あるいは、そこまではいかなくとも、「悠長」で「のんびりした感じ」がスピーディーな現代社会においてはやや特異に感じられるからということがあるのかも知れない。

いずれにせよ、関西談話において著名なこの現象が、ただその存在が語られるだけで、その原因やシステム

についての具体的な言及がこれまでほとんどなされて来なかったことは事実である。それは、文献のみに頼り

がちな(もとより文献による)ことが国語学・日本語学の正当な研究方法であることは間違いないが(従来の研究方法では、なかなか説明が難しい)という事情が関係していたようにも思われるのである。

そこで、本稿では、関西談話における一音節語の会話としてその頻度の高いものを収集し、何故その語が長音化するのか、また長音化する場合としない場合が存在するのかといった問題を筆者の内省や周辺の関西談話話者たちへの取材を通して、もちろん全面解決ではないものの、その一助になればという思いから記してみることにする。

一

まず、関西談話において、一音節語が長音化する状況について説明したいと思う。

その前に、少しくアクセントの上昇調や下降調を記述する方法について述べておきたい。

「○●」式はかなり以前から使用されているアクセントの表記法であるが、この方式は視覚に訴えやすい利点があることに加えて、京阪式アクセントのうち上昇調の一部を表すのにも適している。

例えば、「飴」は東京式アクセントでは「○●」と表されるが、京阪式アクセントの「雨」は「○○●」ではない。「あめ」の「め」が同一の音節の中で後半に心持ち下降するのである。そこで、これを表すのに「○○●」式では「○○●」という図案を採用するのである(なお、この点に関して筆者自身としては「あめ」の「あ」においても、

同一音節の中で後半に心持ち上昇する場合があるように感じている。

すなわち、関西談話のアクセントは単に「高低」だけで表し得るものではなく、一音節内でも高低の変化が生じるといふ少し複雑な様相を呈するのであり、そしてこのことは、「一音節語の長音化」においても似通った事態が存在することを示唆する。すなわち「一音節語の長音化」はあくまで一音節の変化なのであって、間延びすることによって二音節に変化するというものではないのである。

例えば、「葉」に関して、『日本国語大辞典』では「京ア ハー 平安来●○」のような説明がなされている。これは「ハー」のみでは「単なる長音」であるから「●○」を併記してより詳細な情報を提供しようとする意図が感じられる。ただ、このような詳細な説明であっても「葉」の長音化が「二音節化」ではない点、また二音節における下降調ではないことが明確化されにくいという残りが残る。そして、いま、「単なる長音」と言ったけれども、関西談話における一音節の長音化は、一音節の語が同じ音階で横に延びるのみではなく、上記の「葉」のように下降調に延びる場合や反対に上昇調に延びる場合がそれに加わるのである。そしてそれらは二音節として扱えないのみならず、実は一音節内の変化としても扱い難いため、「円を縦で半分に分けて片側を黒、もう片側を白にする(あるいはその逆)」という●○式の表記法を以てしても的確に表すことが出来ないものである。

では、この「二音節でもなければ一音節でもない、一音節語の長音」をどのように表せばよいであろうか。ネイティブスピーカーでない読者にその実態を伝達する適当な方法はないものか。

これに関しては、筆者は以前より気になっているものがあつた。それは、現代中国語における「四声」であ

る。中国語の初心者に対して四声の見本として、つまりアクセントの違いによる意味の違いを示すために、「馬」の四声を例に挙げて説明することがあるが、「馬」に限らず中国語の一音節語における第1声、第2声、第4声はまさに関西談話における一音節語長音化の3種類の音程変化に極めて似通った様相を呈するのである。したがって、筆者はかつて「中国の四声」と「関西談話一音節語の長音化」との間には有機的關係が存在するのではないかと真剣に疑うことすらあった。もちろん、奈良や京都をはじめ、近畿各地は古来より中国との関係が深く、その影響は言語において特に計り知れないものであることから、「一音節語」を延ばして発音するという習慣が中国渡来のものである可能性はある程度支持できるものと思う。ただ、関西談話で長音化する語は漢語のみならず和語にも当てはまるのであって、現に上述の「葉」も和語であり平安時代からの長音化が確認されているし、他にも「蚊」について『金光明最勝王經音義』⁽¹⁾などに「加阿」という長音表記と思われる表記が存在する。無論、和語にもその影響が及んでいるという事実を以て、中国語からの影響の漠然とした可能性までをも否定できるものではなく、それはそれで可能性の存在を提示しておく価値だけはありそうなこと、上で述べた通りである。

ただ、とは言いながら、そのような説明だけで終わるのであれば敢えて本稿を記す意味もないのであるから、さらに明確な一音節語長音化の要因について、このあと日本語文法の見地から検討を加えていきたいと思う。

では、実際に、関西談話において長音化が見られる一音節語を列挙し、それが上昇調、平行調、下降調のいずれに該当するかを、それぞれ中国語の第2声、第1声、第4声(それぞれ②、①、④という表記を用いる)によって示すことにする。なお、①は長音化しないことを示し、数字の併記は両方の場合があり得ることを示している。⁽²⁾

ア行 胃④ 卯④ 絵② 尾緒②

カ行 蚊① 木②・気① 苦②・九① 毛④ 子①

ガ行 蛾① 具① 下① 語①・碁②・五①

サ行 差① 市②・四②・詩①・死師① 酢②・巢① 背④

ザ行 座② 字②・痔① 図① 是①

夕行 田② 血① 手② 戸①

ダ行 度①

ナ行 名菜④ 荷二② 値④ 野①

ハ行 歯葉刃④ 火②日④非① 麩① 屁② 帆①・穂①

バ行 場① 美① 武①

マ行 間① 魔① 身実① 無① 目② 喪藻①

ヤ行 矢②④ 湯② 夜世①

ラ行 蘿① 利理① 紹①

ワ行 輪②

ここで注意されるのは、数字が二つ併記されているものの大半が①の組み合わせである点である。すなわち、平行調に音が延びる場合は、伸びない場合が常に隣り合わせに存在するということである。これが何を意味するかは後述するが、実は①型ほどではないにしろ、②型④型においても「長音化しない」場合は存在するのであって、ここに挙げた語はことごとく、「どんな場合でも必ず」「長音化する」というわけではない。実はそれが、問題を解くカギになるのであるが、それでは「長音化しない」場合とはどういう場合なのであろうか。「胃」を例にとって説明しよう。

(ア) 先ほどから胃が痛い。

(イ) 先ほどから胃痛い。

(イ)の場合には、「胃」は「胃④」になり長音化する。これは、必ず長音化し、例外がない。一方、(ア)の場合は、あまり長音化しない。する場合は「心持ち」延びるか伸びないかという程度であり、(イ)と同様に「胃④」になるのは、ある個人の話癖として定着している場合に限られると言えよう。

ここでわかることは、格助詞が存在する場合には、長音化されることが少なく、格助詞が省略される場合に積極的に長音化が発生するということである。

さらに、(ア)の例文の「胃が痛い」のアクセントを提示すると「●○○○」となり、「胃が」の箇所は「●○」であって「下降調」を呈する。そして、(イ)の例文の「胃」は「胃④」であり、極めて(ア)の場合に

近い様相を呈する。

すなわちこれは、文章内における「一音節語」+「格助詞」のアクセントの変化が、「一音節語の長音化」における音程変化とほぼ一致しているということである。言い換えれば、あたかも省略された「格助詞」を補うかのようにそのアクセント変化に従って長音化が起こっていることが示されている。

では、このような現象は、すべての一音節語の長音化の場合にも当てはまるのであろうか。そこで、先に挙げた一音節語が使われる文章例を挙げて、実際に検討してみようと思う。文例は、一音節語の付属する格助詞を含むものを「が格」「を格」「に格」「所有格」の「の」も僅かに含まれる）の順に列挙し、当該一音節語と格助詞のアクセント変化を●○式で示す。

胃 先ほどから胃が痛い。●○

大半の胃を摘出した。●○

胃に潰瘍が発見された。●○

絵 彼は非常に絵が上手い。○○

絵を描くのは何年振りだろうか。●

思いついた情景を絵に描いてみる。○●

関西談話(会話)における一音節語の長音化について

尾

あの鶏は尾が長い。○○○

馬の尾をつかむ。○●

馬の尾にしがみつく。○○○

蚊

蚊が食う。●●

手で蚊を殺す。●●

蚊に刺される。●●

気

やけに気が立っている。●●

今後は気をつけなければならぬ。●●

些細なことを気にする。●●

木

庭先に木がそびえる。○○○

むやみに木を切り倒す。○●

体ごと木にもたれる。○○○

苦

あらゆる修業は苦を伴う。○○○

どんなことでも苦になる時がある。○●

毛

病気で毛が抜ける。●○

自分で自分の毛を抜く。●○

チュウインガムが毛に付く。●○

子

子が可愛くて仕方ない。●●

子をいったん手放す。●●

わざと自分の子に苦勞をさせる。●●

死

もはや死に近い。●○

偉人の死を悼む。●○

死に臨んで覚悟を決める。●○

詩

優れた詩が心を癒してくれる。●●

子供のころから時々詩を作っている。●●

詩に今の自分の気持ちを込める。●●

師

師が自ら手本を見せる。 ● ● ●

我が師を超える。 ● ● ●

世界でも屈指の師に就く。 ● ● ●

酔

酔が効きすぎている。 ○ ● または ○ ○

腐らぬように酔を入れる。 ○ ● ●

酔には疲労回復の効用がある。 ○ ● ●

巢

ひな鳥の巢が襲われる。 ● ● ●

燕の巢を調理する。 ● ● ●

動物は自然と巢に帰るものだ。 ● ● ●

背

あの人は背が高い。 ● ○ ○

兄弟で背を計る。 ● ○ ○

※ただし「背(身長)」の場合には「せい」もしくは「せえ⁽³⁾」と2音節で発音することが行われてきたことから、一音節の長音化に該当しないと考えることも出来る。

背が広い。●○

背を折り曲げる。●○

背に飛びつく。●○

日照りで田が干上がる。○●

ひとりで田を耕す。○●

田に十分に肥料をまく。○●

血小板が少ないと血が固まりにくい。●●

ドラキュラは人の血を吸う。●●

血に飢えた獣。●●

あいつは小さなころから手が早い。○○

先生の質問に手を挙げて答える。○○

この問題は私の手に負えない。○○

墨が手に付いた。○●

戸

ピシャッと戸が閉まる。●●●

思い切り戸を叩く。●●●

戸にもたれかかると危ない。●●●

名

そんなことをすれば君の名が廢る。●●○

後世に名を残す。●●○

名に負う。●●○

荷

それはあまりにも荷が重い。○○○

やれやれと荷を下ろす。○○○

ひとつひとつ荷に札を付ける。○●●または○○○

値

台風で木材の値が上がる。●●○

お互いの交渉で物の値を決める。●●○

それは値に相当するだけの価値がない。●●○

野

野が焼ける。○○○または○●●

歯

ひたすら野をかける。○ ○ または ○ ●
山奥の野に一陣の風。○ ○ または ○ ●
朝から歯が痛い。● ○

歯医者さんで歯を抜いてもらう ● ○

彼は歯に絹着せぬ言い方をする。● ○

葉

すっかり葉が色づいている。● ○

ヤギが枯れた葉を食べている。● ○

ご飯を葉に包んで寿司を作る。● ○

刃

日本刀の刃がこぼれる。● ○

刀鍛冶が刃を研ぐ。● ○

刃に血のりがべったりと付く。● ○

火

こうこうと火が燃える。○ ○

石で火をおこす。○ ○

関西談話(会話)における一音節語の長音化について

屁	麩	日	非
<p>屁が臭い。 ○ ○</p> <p>屁をこく。 ○ ●</p>	<p>麩が好物。 ● ●</p> <p>麩を水で戻す。 ● ●</p> <p>麩に色を付ける。 ● ●</p>	<p>冬は日が早く過ぎていく。 ● ○</p> <p>指折り日を数える。 ● ○</p> <p>日によって体調が変化する。 ● ○</p>	<p>火に川魚を炙る。 ○ ○</p> <p>火の中に飛び込む。 ○ ●</p> <p>それはお前に非があるよ。 ● ●</p> <p>みずからの非を潔く認める。 ● ●</p> <p>それはあなたの非にあらず。 ● ●</p>

※屁のつっぱりにもならぬ。○●

穂

穂が実る。○○

穂を拾う。○●

帆

帆が風ではためく。○○

帆を張る。○○

帆に風が当たる。○○

間

間が悪い。●●

間をもたす。●●

鬼のいぬ間の洗濯。●●

身

このままでは身が持たぬ。●●

退屈で身を持て余す。●●

その話は身につまされる。●●

無

すべてが無に帰す。 ● ●

※「無の境地」 ● ● この場合には、「無①」となることが稀にある。

目

目が見えない。 ○ ●

暗い部屋で目を凝らす。 ○ ○

夜の読書は目に悪い。 ○ ○

藻

藻が繁殖する。 ● ●

喪

喪が明ける。 ○ ○

矢

足に矢が刺さる。 ● ○ または ● ●

一斉に矢を射る。 ● ○ または ● ●

矢に手紙を付ける。 ● ○ または ● ●

湯

風呂の湯が沸いた。 ○ ○

風呂の湯を沸かす。 ○ ○

おそろるおそろる熱い湯に入る。○●

世 昨今世が乱れていると言われる。○○

思い切って世を捨てる。○○

この作品を契機に世に出てみせる。○● または○○

夜 しんしんと夜がふける。○●

そろそろ夜があける。○○

夜を徹して仕事をする。○●

利 これでは双方に利がない。●●

別に私は利を求めているわけではない。●●

その仕事は利に合わない。●●

絹の着物。●● または○○

輪 月に輪がかかる。○○

輪を投げる。○●

みんなで輪になる。○●

以上から、一部の例外を除いて(それについては後述する)ほとんどの場合、「胃」の文例(ア)(イ)と同様に、文章内における「一音節語」+「格助詞」のアクセントの変化が「一音節語の長音化」における音程変化と一致していることがわかる。

すなわち、一般的に言われる「関西談話における一音節語の長音化」とは、どのような場合においても固定的に実現される言語現象ではなく、格助詞の有無というシチュエーションと深い関りがあったのである。

二

それでは何故「関西談話における一音節語の長音化」が「格助詞の有無」と関係するのであろうか。

それは、そもそも「格助詞」が、日常の会話の中でも「親しい間柄」のあいだで交わされるものに於いてはしばしば省略されるという事情と関係がある。おそらく地域に関係なく次のような会話は日常に行われているであろう。

(ウ) 「ねえ、そのスプーン取って。」

(エ) 「これ、前から欲しかったのよ。」

(オ) 「あなたのメルアド、ここ、書いてちょうだい。」

これらの会話では、もし書き言葉などに使われる正格の文法に従うならば以下のように格助詞が補填されるはずである。すなわち、

* (ウ) 「ねえ、そのスプーンを取って(下さい)。」

* (エ) 「これが前から欲しかったのよ。」

* (オ) 「あなたのメルアドを、ここに書いてちょうだい。」

となる。

普段の談話(会話)において、格助詞「の」「より」「から」などが省略されることはないが、「が」「を」「に」などが省略されることは非常に多い。そして、上の(ウ)(エ)(オ)では省略されている格助詞の直前の語はそれぞれ「スプーン」「これ」「メルアド」「ここ」というように何れも二音節以上の語であるが、これが一音節語になるとその音韻的不安定さも手伝うのであろうか、格助詞が存在するときの「一音節語」から「格助詞」へのアクセントの流れが「一音節語の長音化」の音程変化として実現されるのである。

このような現象はもとより関西談話にのみ見られるものでないことは言うまでもない。たとえば東京談話の

(カ) ちょっと手貸して

の場合、「手」が一音節で発音されるだけでなく、「手^④」のように「長音化」が起こることがある。また、九州談話(地域は特定していない)の

(キ) 私の目見んさい

の多くの場合も、「目」は「目^④」となり長音化する。そして、(カ)も(キ)もともに格助詞「を」(九州の場合は「ば」も)を伴った場合のアクセントは「手を●○」「目を(目ば)●○」となつて、「手^④」「目^④」とほぼ同じ音調を示すのである。

つまり、格助詞を省略しがちな日常の談話においては、多少の方言差による頻度の違いはあるとしても、ほぼ一様に「一音節語の長音化」は起こり得るのである。

ところでこれまで、一部の格助詞が省略され得ることをいけば自明のこととして取り扱って来たけれども、それを導く根拠のひとつとして格助詞の持つ「融通性」が確認されるであろう。

室町時代には、各地方によって使用例が異なる格助詞に関する格言として「京に筑紫へ坂東さ」が存在した。これは三条西実隆の大部の日記『実隆公記』所載のものであるが、同趣旨の格言が、同時代イエズス会の宣教師であったジョアンロドリゲスの著『日本大文典』では「京へ筑紫に坂東さ」として載せられている。「へ」

と「に」の微妙な運用上の差異にも議論が及ぶ問題ではあるが、今はその点はさて置き、どうやら「へ」と「に」については京都での認識がそれほど厳格なものではなかったことが両資料によって明らかになる。さらに坂東の「さ」については、ここでは「に格」の異種として挙げられているが、実際「さ」は「を格」にも使われるのであつて、その意味では、この格言は、格助詞の職能にはある意味無神経であり、地域間のバリエーションやその語の持つ権威のようなものにむしろ主眼を置いていることがわかる。

そして、こうした格助詞の職能に関する「融通性」「あいまいさ」と言っても良いかもしれないが、次のようにも言えるであろう。

すなわち、格助詞は一般に「体言または体言に準ずるものに付いて、その体言が他の語とどんな関係にあるかを示す助詞」と定義されるが、日常の談話において一部の格助詞は省略が可能であることから、それらに關して言えば、「体言が他の語とどんな関係にあるかを示す」は「体言が他の語とどんな関係にあるかをより明確にする」と読み替えることも可能である。「から」「より」「の(所有格)」のように省略できない格助詞も存在することから、既存の格助詞が省略されたのか、省略でき得る格助詞が後から付け加えられたのかの先後関係を軽々に論じることはできないけれども、少なくとも「一音節語の長音化」が、省略された格助詞を補うべく、つまり存在しない格助詞の「格関係をより明確にする」という使命に準じようとする心理が、それが本来存在していた時のアクセント変化と切っても切れない因果関係を生み出したことは間違いないとして良いであろう。

四

第二節で述べたように、同じ一音節語であっても長音化するものとしなないものがあり、長音化しない場合は①と共起する場合がほとんどである。逆に①の長音化をするものは③すなわち長音化しないことがほとんどの場合にあり得るということになる。

これについても、格助詞との関係で説明することができよう。例えば「血」の場合、「血が固まる」の「が」が省略されると「血①固まる」となる。このように明らかに格助詞が省略された場合には他の②や④の場合と同様に長音化することは変換することがない。しかし、「血」が単独で発音される場合には長音化しないことがあ
る。これは、「血①」と発音する場合は単純に同音程で延びるだけで、「目②」や「毛④」のように長音化した
際アクセントの高低差が生じないために、長音化しているのか、していないのかは発話者にとっても明確な意
識が持ちにくい。したがって、明確な意識に乏しい長音化は時として長音にならずに終わることも有り得るこ
とになる。この点に関しては、「この問題は私の手に負えない」と「墨が手に付いた」の用例を比較するとわ
かりやすい。前者は「○○」であり後者は「○●」であるが、「手」が発話される場合に必ず長音化するのは
「○●」の形式に準じたもの、つまり「手②」の場合に限られるのである。「手」は単独で発音されるとき
「手②」にはなるが「手①」になることはない。同様のことは、「木」「酢」「荷」「野」「火」「屁」「穂」「目」「
世」「輪」についても言うことができる。これらには、同じ格助詞内もしくは異なる格助詞の使用例におい

て複数の種類のアクセント変化が確認できるが、一音節語が長音化する場合には、同音程で延びる「①」ではなく、高低差が付く「②」か「④」として実現される。

関西談話の一音節語が長音化するのは単にだらしなく延びているのではなく、「省略された格助詞を補う」という意識が潜在的に存在するのであるなら、同じ音程で単純に延びるだけの「一音節語①」ではその使命を果たしている感覚が薄く、したがって格助詞が下接している場合はもちろんのこと、単独で発話される場合も長音化しない事態が生じるのであった。

また基本的には格助詞との関りであることは同じなのだが、次のような長音化の有無を決定する要因も存在する。

(ク) 黄信号

(ケ) 黄不動

(ク)の場合、関西談話では「黄①信号」と発話されるが、東京談話においても僅かに「黄②信号」と発話される傾向にある。これは、「黄の信号」という「の」の存在が意識されているからであり、「の」の省略を補完する意味合いでの長音化が起きているのである。それに対して「黄不動」の場合には、たしかに「黄の不動」には違いないが、「黄信号」のように「黄①不動」とはならない。長音化は一切しないのである。「信号」には「黄信号」「赤信号」「青信号」があり、一方「不動」にも全く同様に「黄不動」「赤不動」「青不動」が存在す

る。この点では両者に違いはないのであるが、では何故このような差異が生じるのであろうか。

「黄」「赤」「青」と「信号」との間には、ある種の「隔絶感」と呼べるようなものが存在する。つまり、「信号」は「黄」にも「赤」にも「青」にもなるのであって、「信号」を中心にした「黄」「赤」「青」のバリエーションとして意識されるのである。しかし、一方「黄不動」の方は、「不動」を中心としての色のバリエーションとしてではなく、「黄不動」「赤不動」「青不動」はそれぞれが完全に独立したものとして捉えられ、「不動」と「黄」「赤」「青」の間に選択可能な意識が割り込める余地は存在していないと言える。言い換えれば、「黄不動」「赤不動」「青不動」はそれぞれがれっきとした固有名詞であって、そこには「変化する色」のバリエーションとしての認識はないのである。だから、「黄不動」は事実としては「黄の不動」ではあっても人の認識においては「黄の不動」という捉え方は存在しない、あくまで「黄不動」は「黄不動」という固有の存在なのである。したがって、「黄不動」の「黄」は決して長音化しないことになる。

おわりに

以上、関西談話における「一音節語の長音化」のメカニズムについて見てきたわけであるが、総じて言えることは、特にこのような言語事象においては、たとえ長い年月のうちにその因果関係が一見風化してしまったように思われることでも、「そのようになる」理由は存在するのであり、その地域に固有の解明不能な言語事象であるように思われていることであつても、普遍的な法則が存在している可能性は否定できないということである。

また、言語事象に限らず、いわゆる「地域差」というものは、それが第三者によって指摘されると、かえってその色合いが濃くなつて行くこともある。本稿の内容に關して言えば、当初、「長音化する一音節語」と「長音化しない一音節語」が併存していたとしても、ひとたび「長音化」が指摘されるならば、過度の類推から徐々にすべてが長音化する方向に進んでしまうということである。

本稿の内容は、一見俗な内容ではあるが、いたずらに看過することなく、これからも引き続き考察の目を向けていきたいと考えている次第である。

注

- (1) 築島裕解題・索引『古辞書音義集成第十二卷 金光明最勝王經音義』古辞書研究会
- (2) この調査にあつては、筆者「京都市出身、六十歳代」、女性「京都市出身、六十歳代」、女性「京都市出身、八十歳代」、女性「大阪府寝屋川市出身、五十歳代」、男性「兵庫県姫路市出身、七十歳代」の協力を得た。
- (3) かつては母音要素が「o」に発音される単語は、それが後接語を取る場合には「o」に変化するという決まりがあったかと思う。したがって、「背くらべ」は「せえくらべ」と発音するのが正しかったが、現在では正確に「o」と発音するように変化してきている。これは「平成」の元号を「へえせえ」とは読まず「へいせい」と読む方向が示されたことも関係しているのかも知れない。ちなみに、一九六八年に発売された、フォーケクルセダース『青年は荒野をめざす』（作詞…五木寛之）では、「せえねん」の発音で一貫されている。
- (4) 『日本国語大辞典』の「さ」の項目には、「目的格の体言に付く」「さ」の例として、千葉県東葛飾郡「くどのまさささんだしてくろ（かまどのまさをもつと中の方へつっこんでくれ）」が挙げられている。
また、御伽草子『大仏供養物語』（室町時代物語集所収）には、「御ちぎりふかかりし、耶修多羅夫人をそむき、いとをしみの御子、羅羅をふりすてて」とあり、「くを背き」ではなく「くを背き」の用例がある。